

Small Story in Kamijima



小さな島の暮らしを守る

傾斜のきつい細道を通り、毎日見回りを行う木村さん。額には汗がにじむ。

高井神島(たかいかみじま)。

人口 36人 世帯数 24 高齢化率 69.4%

「限界集落」(65歳以上の高齢者が、人口比率で住民の50%を超えた集落のこと)と呼ばれるこの地では、集落の維持が危機的状況となっている。

現在61歳の木村さんは、この島では「若手」。2010年より集落支援員として、島のお年寄りのお宅を毎朝見回る活動を行なっている。

人口38人の島で暮らすこと。暮らし続けていくということ。木村さんの活動に同行させてもらいながら、お話をうかがった。

お話をきかせてくれた人

集落支援員・高井神島自治会長
木村 定さん (61歳)

1950年高井神島生まれ。漁師の家庭に育つ。当時、横浜に住んでいた兄を訪ね、横浜の高校に入学。東京の大学に進学し、卒業後そのまま東京で就職。以来39年間、東京生活を送る。ご両親の介護をきっかけに、2006年に帰郷。ご両親が亡くなった今は、島の「若手」として、集落支援員や自治会長など、様々な場面で、島の暮らしを支えている。



弓削島と高井神島を結ぶ快速船「ニューおしま」。島と外の世界をつなぐ唯一の交通機関だ。1日4便のこの船が島の生活を支えている。8時47分高井神島着の1便に乗って島に向くと、木村さんが港で待っていてくれた。

木村さんは、2010年より集落支援員としての活動を行なっている。集落支援員は、限界集落の目配り役として、中山間地域の集落を巡回し、各世帯の状況把握や集落の共同作業の手伝い、困りごと相談など幅広い分野で支援するもので、総務省が2008年度から始めた事業である。

朝の見回りが毎日の日課。その日課に、同行させてもらう。高井神島に暮らす24世帯のうち、

8世帯が高齢者の一人暮らしのお宅だ。毎朝、木村さんが、1軒1軒のお宅を訪ね、変わりがなにか声を掛けていく。

民家は、港を囲むように傾斜のきつい斜面に立っている。細い路地、急な坂道。澄み切った空気。遠くで船の汽笛だけが聞こえる静かな朝。木村さんは、黙々と傾斜の急な坂道を登っている。

集落を見下ろす高台のお家に着く。「ここが島で一番高い場所に住んでいる人です。」そう言って、玄関の戸を開ける。「おはようございます。変わらないかね？」と声をかける木村さん。ここは、一人暮らしのおじいちゃんのお宅だ。

海と家々を見下ろせるとも景色の良い高台に建つ家。最高の眺めだが、この家の主がここまで登ってくるのは本当に大変なことだと思う。普段の移動には、原付を使っているという。愛車の原付は、まさに彼の「足」そのものなのだ。これがないと、外に出る機会はさらに激減してしまうだろう。

生活に不便な土地でも、ここが彼の家だ。小さいけれど、綺麗に手入れをされた畑。風に舞う洗濯物。海を眺めるために置かれた庭の椅子。ひそやかな暮らしがここにはある。

別のお宅に向う。今度は、一人暮らしのおばあちゃんのお家だ。「この前言った保険証の件、

どうなった？」、「これ、手続きに必要な書類だから名前書いて、ハンコ押しとって。次、取りに来るけん。」安否確認だけではなく、事務処理のお世話もしている。

次のお宅に向う途中、畑で作業をしているおばあちゃんを見かけた。「おーい、変わらないかね？」と、木村さんは叫ぶ。おばあちゃんは、小さく手を挙げる。小さなこの島では、当然、誰がどこに住んでいて、どこの畑をもって、何をしているのか、みんなが知っている。非常に濃いコミュニティの中で生きている。

「さあ、ここは大変だぞ」と言って、さらに急な斜面を登っていく。この上には、93歳のおばあちゃん

が住んでいる。玄関で声をかけたが出てこない。庭にまわると、彼女は離れで洗濯をしていた。耳が悪いので、耳の傍で大きな声で話さないと聞こえないようだが、「ご苦労様です」と穏やかに私たちを出迎えてくれた。

離れを見せてもらうと、現役で活躍している五右衛門風呂があった。お風呂を沸かすための薪には、海辺に流れ着いた流木を使っているという。浜から自宅までは急な坂が続く。この坂を90歳を超えた彼女が流木を持って登っているのには、本当に驚く。納屋には、これから迎える冬のために少しずつ集められた流木が、綺麗に並べられていた。

93年働いてきた小さなその手が、何かを語りかけてくるような気がした。



大きな船で広い世界に行ってみたくて 思った子ども時代

一木村さんの生い立ちを教えてください。

小学校、中学校と高井神島で育った。高校受験のとき、船に乗りたくて、香川の高校を受けたんだけど、ろくに勉強をしなかったから、落ちてしまっ。その頃、兄が横浜の方に居ただけだけど、横浜の私立の学校ならまだ間に合うぞと言われて、横浜の高校に行くことになったよ。

子どものころ、因島の造船所には、10万トン級の大きな船があつてね。あれを見てね、子どものころは、「漁師の小さな船じゃなくて、あんな大きな船に乗って外国に行きたいな」って憧れて、船に乗りたくて思ってたよ。

中学を卒業して、外に出たときはびっくりしたあ。こんなでっかいビルの中で、俺はこんなところに住めるのかって思ったよ。岡山から夜行列車で一人で行かされてね。それはもうドキドキしたよ。土生(因島)から外に出たことなんてなかったんだから。親父とおふくろと岡山で別れてさ。一睡もできなかった〜(笑)。でも、一人で行かせたことを親父は死ぬまで、悔やんでたね。「訳もわからないところね、一人で行かせたのは俺はたまらなかった」って、よう言ってたね。

いろいろあつたけど、やりたいことは好きなようにやってきた。あんまり勉強はしなかったけど(笑)。授業には出ずに、ほんとに空手ばかりやってたなあ。本当は、空手だけで飯を食おうと思ってたんよ。高校から空手を始めて、大学では主将も務めた。海外の支部に教えに行ったりもして、スイス、フランスとか色々な国に行った。

「島の役に立つようなことを」という 父の言葉から空手の指導を始めた

今は、魚島(隣の島)の子どもたちに空手を教えている。亡くなる前、まだ元気だった頃に、親父がね、「もうお前、島に住む気で来たんだから、島の役に立つようなことをしろ」と言ってたね。

それで、自分に何ができるかと考えたときに、もう20年も30年も教えてきた空手があるじゃないかと思ってね。この島には子どもがいらないから、魚島(隣の島)に教えに行くようになって。なんだかんだ言っ、もう3年になる。



大学卒業後は、そのまま大学の職員として残ってね。就職の時期は、ちょうど第2次オイルショックで、内定取り消された友達とかもいたんよ。本当に厳しかった。その後は、病院でフィルム管理の仕事をしたりして、39年間ずっと東京で働いてたんよ。



太陽の昇る位置で季節の移ろいがわかるという海岸。

一こちらに戻ってきた経緯は？

父親の具合が悪くなって。お袋も歳で。島に戻ると言ったら、親は「せっかく大学まで出してやったんだから、俺たちのために帰ってくるな。俺たちの方が恥ずかしい。何のために、大学まで出したのか」って言うんだ。

自分の気持ちとしては、やりたいことは全部やってきたし、東京に居たってある程度の役職にも就いて、もう大して何もないんだからという思いがあつてね。親は、なかなか返事してくれなかったんだけど、最後は「わかった」って納得してくれたんよ。

本当は、自分は言葉でのコミュニケーションはあまり得意じゃない。でも、空手を通じて生まれた絆は深く、空手部の後輩とは今も連絡を取り合っている。精神面でも強くなった。だから子どもたちにも、都会で負けない心を身につけて欲しいと思って、空手を教えている。

小さなところ、不便なところほど大事に

一協力隊へのメッセージを

あなた方はこれから頑張らないといけな。いい島に、よりよく住みやすい島にしてください。人数が少なく、不便なところほど、大事にしてくださいよ。

一私は、小さいところだからこそ、変えられると思っています。

でもね、取り残されるような気がしてどうにもならない。他の島から離れているから余計にね。



23世帯が肩を寄せ合って暮らす。資材の輸送費が高いため、住宅の維持、補修、回収が難しく、老朽化が進む家も多い。



一緒に山道を歩いている途中で、ふと足を止める木村さん。何だろうと思ったら、あけびを見つけたらしい。私には、ただの草むらにしか見えず、その目の良さに驚く。鳥に食べられずにわずかに残っているあけびを見つけ、木に登って取ってくれる。一度で取れない高い場所にあるあけびも、「しゃくだな」と言って、何度もトライしてそう簡単には諦めない。「危ないから、どいて」と、木に登り、枝をしならせる。その目は少年のようにキラキラ輝いていた。

あけびの思い出

「我々が子どもの時は、あんまり食べ物が裕福じゃなくてね。学校から帰っても、親は漁に出ているんだよ。お腹がすいているから、一目散に山に行き、あけびを取りましたよ。で、学生服を破いちちゃったりしてね。100個ぐらい取ってね。たくさんあったんだよ。

あけびを見つけたら、取ったもんじゃなくて、最初に見つけたもんが食べる権利があるんだよ。だから、遠くにあっても、『見つけたから、取らないで〜』って先に言うのよ。目がいいもんの方が、たくさん取れるんだよね。

甘いものもあんまりなかったからね。甘いものを食べられるのが嬉しくて。でも、腹にたまらんから、種まで食べてね。後が大変なんよ。昔は、トイレが汲み取り式で、おまけにそれを畑に撒いてたから、畑があけびの種だらけになって(笑)。でも、不思議なことにその種から芽はでないんだよ。不思議なもんだねえ。」



木村さんが一生懸命取ってくださったあけび。割って食べると、優しい甘さがじわーっと口広がった。

高井神島を歩く



高井神小中学校

平成19年に、休校となった高井神小学校(中学校は平成15年に休校)。子どもが戻ってきたらいつでも開校できるように、廃校ではなく、休校という形をとっている。木村さんもこの卒業生。当時は、海を望む小さな運動場で行われた当時の運動会の様子を懐かしそうに語ってくれた。木造平屋の懐かしい校舎が今も子どもたちを待っている。



関道神社

かつては秋祭りも行われていた島のお宮。今は、継承する人がいなくなってしまい、途絶えてしまった島の祭り。手入れをする人がいないため、参道までの道は、草木が茂り、参拝に行くのも一苦勞。「初詣に行く人がいるかもしれんけん、また草刈りにこんとなあ」と木村さん。



高井神灯台

大正10年に建てられた灯台。以来1世紀近く1日も消えることなく海の男の道しるべとして瀬戸の航路を照らしつづけている。木村さんが子どもの頃は、灯台守が住んでおり、島で唯一「電話」のある場所だった。その頃は、島民が燃料を背負って運んでおり、木村さんもお小遣い稼ぎに手伝っていたそう。灯台までの山道は、冬でも汗が出るくらいハードなルート。



海岸沿いのスイセンの花

島が明るくなるようにと、海岸沿いの道に植えたスイセンの花。

台風の時に、潮を浴びてしまい、思うように成長がすまないという。春にはキレイな花が咲くように願うばかり。

小さく弱いところから

今回お話をお伺いした木村さんが暮らす高井神島は、いわゆる限界集落と呼ばれる地域です。一日四便の船が、島の暮らしを支えるまさに「生命线」となっています。

上島町には、大きく四つの地区がありますが、他の三地区と距離的に離れている魚島・高井神島地区は、特に高齢化が著しく、集落の維持が困難になつてきている地域です。高井神島では、神輿の担ぎ手や太鼓の叩き手がおらず、島の一大行事である秋祭りも途絶えてしまつている状況です。人口減少、主な産業である漁業の衰退という状況の中、生活していくのに精一杯で、祭りを継承していくということなど考えられなかったのだと木村さんは話されていました。

お祭りの囃子唄などの口承文化は、一度途絶えてしまうと、もう取り戻すことができません。受け継がれてきたものを次の世代に繋いでいくという、先代達が当たり前にしてきたことを、わたしたちも当たり前にしていかなければならないのです。人が少なくなっていくのは仕方がない。全く同じ規模や形で祭りを継続させていくことはできないかもしれない。それならば、次の世代につないでいく「新しい形」を考えていかなければならないと思うのです。

木村さんにお話をお伺いするなかで、度々登場するお父様のエピソード。島を出るとき、戻るとき、戻ってから。それぞれの場面で、父と子の男と男のドラマがあつたのだと思います。物質的には裕福ではなかつた時代、人の気持ちはもつと「人間らしかつた」のでしょう。

「人数が少なく、不便などほど、大事にしてください」という木村さんのメッセージ。取り残されるのではないかという不安。そんな気持ちに何か光を与えることができれば。

変革は、いつも小さく弱いところから始まるものだと思います。

click

本誌のコンセプト

かみじまに行ってみよう

かみじまの過ごし方 その2

レンタサイクルで、島1周。

弓削、生名、岩城で借りられます。1日500円から。

今治から快速船で1時間。とにかくのんびりしたいあなたに。



えらいこまいな

About ME



文と写真と編集
ふじまき みつか

1983年山梨県生まれ。A型。ふたご座。国際基督教大学教養学部国際関係学科専攻。山梨→東小金井→フィンランド→吉祥寺→かみじまちょう

都内マーケティング会社に勤務ののち、2011年10月より、愛媛県越智郡上島町(人口約7500人)の離島に移住。島おこし協力隊として活動中。

最近ハマっていること:ジャムづくり、漬け物づくり、みかんの皮活用法、編み物

click

いいね!してください
facebook

協力隊の日々をチェック
blog



click

かみじまのことば

たちまち

- 【意味】 とりあえず(「短時間」という意味ではない)
- 【由来】 広島弁。上島町の中でも地域によっては使わない。
- 【用例】 居酒屋にて。
「じゃあ、ビールと唐揚げ。じゃあそれで、たちまちで。」
(ビールと唐揚げ。とりあえず、それで。)



How do you think?
ご感想はFacebookへ mailでも